
猫耳執事の高貴なるお仕事。

京なんとかの人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫耳執事の高貴なるお仕事。

【Nコード】

N8322F

【作者名】

京なんとかの人

【あらすじ】

雇った執事はネコミミ！？そう、そんな小説。

第0話：プロローグ（前書き）

嫌猫家の方は読まない方がいいかと。

なお、文法等に不信点があるとは思いますがお許しを

第0話：プロローグ

ココまでのあらすじ

舞台は桜園町おうえんいちの大金持ちとの噂も高い上条家かみじょう。
その次女である雅お嬢様みやびは夏休みに入るにあたってひとつの決断を
しました。

『よしっ、お母様たちが帰る前に家を綺麗にしよう!』

夏休み中彼女は姉妹両親共に海外出張のためずっと一人。

だからせめて褒められるようなことをしたくて思い立ったのでした。

ですがここで問題が出てきます。

決めたいいのですが彼女のもつ洋館は広すぎて一人では掃除し切れ
ません……。

その上。

毎日椅子に座って紅茶を飲んでいるような彼女には掃除を出来る体
力もありません。

そこで彼女は考え付きました。

『だったら、誰かにやらせればいいじゃない!』

そう思い立つたら吉日。

早速彼女は有り余る財力にものをいわせて有能な執事を取り寄せました。

自らを「シヤム」と名乗るその執事は
家事や料理は完璧

また紳士的で社交的な完璧な男でした。

ですが、彼には唯一の秘密がありました。

彼の頭上には、可愛らしい猫の耳が生えていたのです。

第0話：プロローグ（後書き）

猫耳メイドさんがいて何故執事はいないの？
ってことで書いてみました。

誰かのネタにでもなれば幸い。

第1話：猫耳への驚愕・動揺・そして納得（前書き）

雅の性格がイメージと何か違うような・・・。

第1話：猫耳への驚愕・動揺・そして納得

ここからは現在進行形のお話。

.....

「雅お嬢様？どうかされましたか？」
これはシヤムの言葉。

あれ・・・シヤムだね、喋っているのは
冷静になれ私。いくら目の前の出来事が信じられなくてもっ！

「お嬢様？ご気分が優れないのですか？すぐにお医者様をお呼びし
ましようか？」

シヤムが私のことを覗き込む。

7

落ち着こう、落ち着いて今の状況をゆっくり把握していこう。
まず、目の前にいるのは昨日から雇っている執事のシヤム。
それで私は上条 雅。
ここは私の家。

それで何が起こった？

私がシヤムを呼ぶために彼の部屋にいった。ここまでは良い。

ドアを軽くノックして返事も聞こえぬうちに入った。少し失礼だ
けども良しとしよう

そしたら・・・・・・・・・・彼にあってはならないものがあつた。

何があつた？

思い出せない

意識を一瞬彼にやってみる

・・・・・・・・猫の耳。

そう、それだ。

私の脳を混雑にしているものはそれ。

あれは何なの！？

何なの？

・・・・・・・・・・な・・・・・・・・の！？

全ての思考が急激に加速する

そして急に目の前が真っ暗になって、私はそのまま沈んでいってしまっ
た。

.....

目が覚めた。

やわらかいベッドの上に今私は寝ている。

「起きられましたか、お嬢様」
隣に腰掛けるのはシャム。

『.....どうなったの？』

私は彼に問いかけた。

「お嬢様が急に卒倒なされたものですから、お医者様にも見てもら
いました。異常は.....」

どうやら慣れないショックが急にきたせいで倒れてしまったらしい。でも、私にはもっと知らなくてはいけないことがあった。

『・・・・・・・・・・みみ』

「・・・・・・・・・・なにか仰いましたか？」

『・・・・・・・・・・だから！あなたの耳よ！』

私が倒れた原因をストレートに言っちゃった。

すると彼は軽く苦笑して

「・・・・・・・・・・そうですか、ばれてしまいましたか」と言っ

びよこんっ！ と頭から耳を出した。

『！！！！！』

驚いてしまう。むしろ驚かない人がいたら全財産あげてもいいくらい。

そんな私を尻目にシャムは耳を申し訳なさそうにぼりぼりとかいている。

『・・・・・・・・・・それは・・・・・・・・・・本物？』

私が恐る恐る聞くと、戸惑うことなく

「はい、私の生まれつきです。お嬢様を驚かせてしまって申し訳ありません・・・」

私は今もっている疑問をすべて聞いてみることにした

なんでそうなっているの、とか

今までどうやって生きてきたの、とか

あなたはヒトとネコどっちなの、とか

とりあえず、私自身が落ち着くまで質問を続けてみることにした。

小一時間ほどたつて。

私は質問を投げかけることによってやっと落ち着きを取り戻してきた。

すると彼は申し訳なさそうに

「お嬢様、こんな猫でございませうが雇ってくださいますか？耳は特に支障は無いと思うので……どうかお願いします」

正直、少し迷った。

だがここまでやってくれる執事もいないので結局雇うことにした。

「ありがとうございますお嬢様！これからは貴女様のことを命賭け

でもお守りします。では私は紅茶を入れてきます。なにかリクエストは？」

私がストレートのダージリンを頼むと彼は軽く一礼をして部屋を出て行った。

そして、いまごろに気づく名前の「シャム」の意味。

なるほど、彼の性格にぴったりだ。

第1話・猫耳への驚愕・動揺・そして納得（後書き）

シヤムより日本猫の方が好きです。

第2話：掃除開始・少しの謎。（前書き）

シャム掃除開始編。

第2話：掃除開始・少しの謎。

さて、私の家にシャムが来てから一週間たち、馴れ合いが済んだころのこと。

猫耳にも慣れて、私達はいざ家の掃除に入ることにした。

『では、掃除を始めるわ。シャム、家の構造は解ってる？』

「はい。猫ですから」

『それは心強いわね。では後は頼んだわ』

「お嬢様はどうなされるのですか？」

『もちろん、休むわ。外は暑いし』

するとシャムは一瞬困った顔をしたが、仕方ないですねと出て行っ

たりあえず私はクーラーの効いた応接間でゆっくりアイスティーを飲むことにした。

.....

「.....さて、どこから手をつけましょうか」

私はながーい廊下を歩きながら呟く。

この家は最初見たときから思っていたが広い。

部屋数はざっと70部屋、しかも5階建て。いくら猫の私でも全て把握するのは苦勞した。

驚いたのは雅お嬢様でさえ全ての部屋には行ったことが無いという

ことだった。

掃除は広い部屋から始めたほうが効率がよい。

「では、ここから始めますかな」

私は1階の一番端にあったなんとも重厚な扉を開く。

部屋は書斎になっていた。ただし使っている気配はない。

前の机に3つ置いてあった写真を見してみる。まずこれはお嬢様方の小さいころの写真だ。

綺麗に段状に並んで写っている。

一番上が長女の紗依お嬢様、

次が雅お嬢様、

そして雅お嬢様とは1歳妹だという真依お嬢様。

次は多分お父様とお母様の写真だろう。

お父様の名前は確か上条 依鳥様

お母様の名前は上条 咲子様。

「次の写真は何だろう……」

目を向けてみる。そこには美しい人間の女性が写っていた。

「……綺麗な方だ」

猫の私でも分かる。奥様の若いころの写真だろうか。

おっと、危ない。仕事をしなければ。

私はその部屋をある程度片付け、次の部屋に向かった。

次の部屋のドアを開けると下り階段があった。
これより下に部屋があるなんて聞いていない。多分、雅様も知らないだろう。

とにかく、下ってみることにした。

中は夏だというのにひんやりと冷たく、猫系の私には快適な空間だった。

電気らしきものは無かったが、それも猫系の私には関係なかった。

ここはワインセラーか何かだろうか？石畳の廊下はどこまでも続いていく。

ひとつドアを見つけた。ドアを開け中に入る。

埃が酷い。

中には質素な椅子が一脚と机がひとつ。周りは石で囲ってある。奇妙な感じがしたのでここはパスさせてもらおう。

さっきの廊下を戻り、足を進める。

.....おかしい。

進んでいるはずなのに元来たところに戻ってしまつ。
方向が分からない。

身の危険を感じ、一旦1階に上がることにした。

.....

椅子に座ってくつろいでいるとドアをノックされた。

『お嬢様、失礼します』

シヤムが入ってくる。

「あら、もう掃除が終わったの？」

冗談交じりに私は問いかける。

『いえ、まだ1部屋ですが・・・』

彼は苦笑して答える。

「でしょうね、この家は広いもので、どうかしたの？」

『・・・はい・・・この家には強い磁力を出すものはありませんか？』

どういう意味だろう。

「・・・どういこと？」

『いえ・・・掃除をしていたら急に方向感覚を失ったもので・・・私は猫ですから・・・』

そつえば昔聞いたことがある、猫に磁石をつけると方向が狂うつて。

「・・・いいえ、きっと無いはずだわ。でも私もこの家のことよく知らないから・・・』

両手を挙げるポーズをする。

『そうですか……はい、分かりました。では戻ります』
「無理はしなくていいわ。主人としての唯一の忠告だと思って」
『はい、ありがとうございます。では』

彼はいつもどおり一礼して出ていった。

私も考えてみる。磁石？

そして急に何かが頭を過ぎった。

「……っ!!!？」

何？今の。

だめだ、最近頭が弱い。

私はそれを猫耳ショックの反動だと思い、好きな小説で気を紛らわすことにした。

第2話・掃除開始・少しの謎。(後書き)

冬に夏の物語書くのは絶対にやめよう。

第3話・雅の夢、そして恐怖心（前書き）

全般、雅編。

第3話：雅の夢、そして恐怖心

1階には部屋が20部屋ほどある。

私は10部屋前後を軽く掃除し、休憩を摂る事にした。

一旦お嬢様に報告をしに行こう。

・・・コンコン

「失礼します」

室内に入る。

「お嬢様、10部屋の清掃が終了・・・・・・・・ん？」

返事がない。まさかまた卒倒されたのでは!?

私は慌てて椅子に近づく。

・・・すう・・・すう・・・

寝息が聞こえた。

その人からは愛を感じる。

偽りではない、確かな愛が。

夢・・・・・・・・？

急に芯から冷えてきた。うう・・・寒い。
ぼんやりとした世界。朦朧とした記憶。私・・・・・・・・寝てたんだ。

ふと近くの机に手紙があることに気づく。

『掃除10部屋終わりました。今から買い物に行ってきます、お体に気をつけて。 シャム』

・・・見られたか。寝顔
よく分からないけど悔やむ。

時間ばかりはいくらお金が有ろうと戻すことは出来ない。

「時はお金じゃ戻らない・・・か」
そう、呟いた。

いろいろあつたその夜のこと。

夕食が終わり、私はシヤムに聞いた地下室のようなものに行つてみることにした。

行くときにシヤムは付いて行きたがつていたが、流石に自分の家だからということであつた。

1階に下り、長い廊下を歩く。

そして教えられたドアの前に立つた。これは大きい。なんで今まで素通りしていたんだろう？

ドアを開け中に入る。

第一の感想、とても冷たい。真夏だということにここまで冷たいのは異常なことだ。

猫の彼にはちょうどいいのだろうか、このくらいが。

奥へと進む

本当に懐中電灯を持ってきて良かった、中は真つ暗だ。
シヤムを連れてきたほうが良かったかな・・・。

ひたひたと進んでいく。そして、例の部屋についた。

扉を開ける。

中には彼の言ったたとおりのものがあつた。

椅子

机

ただ、それだけ。

だけど、私はそれを見て急に恐怖心を覚えた。

「圧迫感」

ただ、それだけに尽きる。

目の前がぐるぐると回って、画面が暗くなっていく。あの時と同じ

いや、違う

今回はそんなもんじゃない。

叫び声が聞こえる。

泣き喚く声が聞こえる。

そして、最後には

今日見た夢の風景が広がった。

第3話・雅の夢、そして恐怖心（後書き）

10話完結できたらいいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8322f/>

猫耳執事の高貴なるお仕事。

2010年10月9日03時14分発行